ユベール・マンガレリ『冬の食事』
-ホロコーストにおける「草の根」の執行者たち-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 獨協大学外国語学部フランス語学科 公開日: 2021-09-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 谷口, 亜沙子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21948

ユベール・マンガレリ『冬の食事』
――ホロコーストにおける「草の根」の執行者たち――

谷　口　亜沙子

> ときどき足が滑って、ふたりにぶつかることがあった。ふたりに触れると、安心した。腕や肩があたってから何分かたったあとでも、僕はまだそのときのことを思い出していたし、体はまだそのときの感触を感じつづけていた。
>
> ――『冬の食事[1)]』

1.『普通の人びと』

穏やかで、慎ましい言葉で、静謐な物語を書き続けているユベール・マンガレリは、もしかすると、人を殺したことがあったのかもしれない。そうではないのだとしても、何かある具体的な状況において、自分が決してしたくなかったような、自分は決してしないと思っていたような、なにか「悪いこと」をしてしまったことがあったのかもしれない。

2012年に刊行された小説『冬の食事』は、ユベール・マンガレリが「加害者」の立場に立って語った物語である。それも、ただの加害者ではない。「人類の歴史の分水嶺をなす出来事[2)]」、すなわち、ユダヤ人の大量殺戮に加担することになった三人のドイツ兵の物語である。

ホロコーストを主題とする小説はこれまでにも無数に書かれてきたが、その大半は被害者の視点に立ったものであり、加害者の視点から書かれたものは少なかった。また、その数少ないケースにおいても、ロベール・メルルの『死は我が職業』（1957年）の語り手ルドルフ・ラングがアウシュヴィッツ収容所の所長ルドルフ・ヘスをモデルとし、ジョナサン・リテルの『慈しみの女神たち』（2006年）が保安諜報部に所属するSS将校を主人公としていたように、スポットをあてられる「加害者」は、ナチのヒエラルキーの上部にいる者たちであった。そして彼らもまた、サディストや変質者であったわけではなく、我々と同じような「人間」であったことが示されようとしていた。

それに対して、マンガレリの『冬の食事』に登場する兵士たちは、我々と同

じ「人間」であることが最初から明らかであるような者たち、SS でもなく、ナチズムの信奉者でもなく、だが、第三帝国の組織するユダヤ人絶滅機構の中に容赦なく巻き込まれてゆき、無辜のユダヤ人を大量に殺すことになった、ごく「普通」のドイツ兵である。

私たちは、ホロコーストの遂行者たちが、残忍な悪人であったことを願う。だが、まさしくそうでなかったところに、ホロコーストという「人類の第二の原罪[3)]」の恐ろしさはひそんでいた。命令をくだし、恐るべき殺戮作戦を考えたのがナチの中枢部の人間であったとしても、それを実行し、殺戮装置のひとつひとつを確実に動かすことによって、ユダヤ民族の絶滅という途方もない計画を実現させたのは、我々と少しも変わらない「草の根」の執行者たちであった。最後にはつねに、引き金を引く者たちがいたのだ。

『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』の著者ラウル・ヒルバーグは、殺戮計画の最大の障害は、行政的なものではなく、心理的なものであったと述べている[4)]。殺戮にたずさわったものの大半は、良心の痛みや心のやましさを覚えていた。SS でさえも、ヒムラーでさえも例外ではない[5)]。絶滅計画は、むしろ、人間という存在が、そのやましさを無限に抑圧し、無限に正当化できる生き物であるからこそ、あらゆる心理的障害にも関わらず実現されていった。虐殺は「必要」な義務であり、良心の痛みは「克服」すべき試練とされ、多くのものたちがその試練を「乗り越える」ことによって絶滅過程に加担していった。命令をくだすものは自分が殺戮をするわけではないことによって罪の意識を軽くされ、殺戮をするものは決定したのが自分ではないことによって良心の咎めから逃れた。そして、自分がやらなくても誰かがやるのだからユダヤ人の運命は変わらないという合理化があらゆる水準で作動することによって、史上例のない大量殺戮が粛々と進められていった。

彼らは命令され、強制されていたのだ、と我々はまず考えるだろう。だが、歴史家クリストファー・ブラウニングによる衝撃的な著作『普通の人びと――第 101 警察予備大隊』は、必ずしもそうではなかったことを告げている。ポーランド総督府領にあるヨゼフフのユダヤ人たちを虐殺することになった第 101 警察予備大隊の隊員に対して――彼らの多くはナチズムの信奉者ではなかった――司令官のトラップ少佐は、女性や子供を撃つという任務を果たせないと感じる者は「列を離れてよい」という司令を出したのである。だが、列を離れた者は 500 人のうち 12 人ほどにすぎなかった。後になってから任務を離れた者もいたが「おそらく 10 パーセントの――20 パーセントに至らないことは確かである――少数派だけを除いて[6)]」大多数の者たちは、残虐な犯罪に加担して

いった。

なぜ、いかにして彼らは殺人者になってしまったのか。2007年に刊行された仏訳版の『普通の人びと』の表紙に使用された「第101警察予備大隊」の集合写真を見ると、そのたびに深い困惑を覚えずにいられない。彼らは皆、ごく明るい笑顔を浮かべた普通の男たちに見える。ブラウニングの著作のもっとも感動的な点は、数々の社会学的な分析と説得力のある考察を提出しながらも、彼らが殺人者になっていった過程が決して「一般化」できないものであることに最後まで自覚的なところである。

> どんな人間の行動も非常に複雑な現象である。そしてその複雑な現象を「説明」しようとする歴史家は、ある尊大な態度をとっていることになる。約500人もの人が関わっていれば、彼らの集団的行動を一般的に説明しようとすることは、いっそう危険なことでさえある。それなら、いかなる結論がくだされるべきなのか。われわれが第101警察予備大隊の物語からとりわけ得られるものは、どうにもならない居心地の悪さなのである。これらの普通の人びとの歴史は、すべての者の歴史ではない[7]。

したがってブラウニングの結論は閉ざされたものではない。そして、ユベール・マンガレリは、その一種の「隙間」から、もうひとつの「普通の人びと」の歴史＝物語（イストワール）を語り出した。マンガレリはブラウニングの指し示した道を、小説にしか――マンガレリの小説にしか――できない方法によって押し進めたのである。

> ええ、『普通の人びと』という著作がありますね。ただ、わたしは歴史家ではなく、小説家ですから、もうすこし……さらに「人間」の近くに身をおくというか、事態がどういうふうにして起こったのかを、ただ、秒刻みで、分刻みで……。つまり、わたしが心がけたのは――そうできていればいいんですけれども――、とにかく、なにひとつ「分析」はしない、ということですね。ただ、事態がどういうふうにして「そのように起こりえたのか」ということだけを……[8]。

分析をしないこと、そして目をそらさないこと。それがマンガレリの処方箋である。ホロコーストという「人道に反する罪」を、マンガレリの小説にしばしば登場する貧しい少年たちがおこなう「悪いこと」と同じ延長線上で考える

ことは、限りなくスキャンダラスなことであり、赦されないことでさえあるだろう。だが、その行為の性質がどれほど比較にならないのだとしても、『冬の食事』で三人の兵士を見つめるマンガレリの目は、『終わりの雪』（2000年）で猫の仔を殺す仕事を引き受ける「ぼく」や、『しずかに流れるみどりの川』（1999年）の美しいラストシーンで教会のろうそくを盗んでしまうプリモ少年を見つめるマンガレリの目と完全に――恐ろしいほど完全に――同じものなのだ。

2. 酷寒のポーランドにおける中性代名詞 en

『冬の食事』の部隊では、第101警察予備大隊のように選択権が与えられることはなかったようである。物語が開始した時点で、語り手と、仲間のバウアーとエンメリッヒの三人は、すでに幾度かの「仕事」を経験している。だが、彼らはその任務を耐えがたく感じており、司令官のところに出頭し、自分たちは「一斉射殺」よりも「狩り出し」の任務の方につきたいと願い出る。朝食を抜いたまま、凍えるほどの寒さのなかを一日中歩き回らなければならないのだとしても「射殺」よりはましである。三人は、ひとけのないポーランドの雪景色の中を連れ立って歩いてゆく。そして、さほど熱をこめて探していたわけでもないのに、森の地下に隠れていたひとりのユダヤ人を見つけ出してしまう。ユダヤ人を連れて帰れば、明日も射殺の任務を外れることができるが、連れて帰らなければ、明日はまた一斉射殺をしなければならない。エンメリッヒは逃がそうと言い、バウアーは連れて帰るという。決定は語り手に迫られる。

この物語を語るにあたって、マンガレリは、すでにわかっていること、設定に含まれていることを「語らない」という自由を最大限に行使している[9)]。これは、歴史家にはなかなか許されない自由である。たとえばこの小説には、ナチという言葉も、ドイツという言葉も、戦争という言葉も一度も出てこない。

では、登場人物たちを取りまく具体的な歴史のリアリティを、マンガレリはどのような方法で表現しているのか。ここでは特にふたつの点を指摘しておきたい。

ひとつめは、季節の設定である。『冬の食事』では、ナチズムの横暴性や殺戮の残虐さ、ユダヤ人絶滅計画の厖大さについて、具体的に語られることはない。だが、それらはおそらく、この小説全体をおおっている「外気」の異常なまでの寒さによって、いわば代理的に表象されている。この「寒さ」の過酷さは、冒頭における中庭への集合シーンから、最終ページの帰還のシーンに至るまで、繰り返し描写されている。窓ガラスは「朝か夜かの判別もつかないほど

厚い霧氷で覆われ」(7)、外に出るときは「マフラーを何重にも巻いて後ろでしばり、毛糸の目出し帽をかぶる」。それでも「凍った水が眼球から侵入して全身にひろがってゆく気がするほど」(8) 外は寒い。だが、ひとたび上官の合図があれば、どれほど寒かろうが、即座に整列するために外へと飛び出していかねばならない。この「寒さ」がナチズムの猛威や殺戮行為の隠喩であるとすると、たとえば次のような一節は、どのように読めるだろうか。

> 選択の余地はなかったので、僕たちは命令に従った。けれど、こんな寒さの中、外に出ていくというのは、やっぱり気力がいるものだ。(中略) もう慣れてもいたし、何が待っているのかもわかっていた。それでも、外の寒さには、出るたびにきまって衝撃を受けた (8)。

「選択の余地」がないこと、「命令」、そして「慣れ」。ここにはすでに彼らと「一斉射撃」との関係が暗示されているかのようだ。

続くパッセージでは、さらにその上官グラーフ中尉の話が「今日中には着くだろうが、おそらく夜になるので、仕事は明日にする」というだけの、酷寒の戸外で聞く必要性がまったくないものであること――「命令」の不条理さ――が強調される。

そしてこの時、今日中に「着く il *en* arrivait」(イタリックは論者) といわれているものが一体「何」のことなのかがすぐにはわからないということが、ふたつめに指摘したい点である。つまり「ユダヤ人」は、はっきりと名指されることなく、中性代名詞の en によって――「数」でとらえらえているのか「量」でとらえられているのかさえはっきりしないまま――示されているのである。その後も「どれだけ着くのかは教えてくれなかった combien il *en* arrivait」(9)「見つけて帰らなければいけなかった il fallait qu'on *en* trouve et qu'on *en* ramène」(24)「明日また殺すことになってもいいから Je veux bien *en* tuer demain」(134) というように、「ユダヤ人 des Juifs」は彼らの言語において、完全に透明化されているのだ。ナチが「殺害」や「絶滅」という言葉を避け、「最終解決」や「特別措置」などの官僚的な婉曲表現を利用していたことはよく知られているが、マンガレリは、その欺瞞性と暴力性を、フランス語の中でもっとも抽象的な、もっともあいまいな en の一語に頼ることよって移し替えた。そして、繰り返される一斉射殺のなかで、彼らのような兵士たちにとってすら、ユダヤ人がすでに en となっていた現実を示したのである。

だが、その「一斉射殺」の現実とは、一体どのようなものだったのか。

3. 射殺によるショアー／移動殺戮部隊(アインザッツグルッペン)

ナチによるユダヤ人の抹殺過程には、大きくわけて二つの段階があった。第一段階の作戦行動は1941年6月22日、バルバロッサ作戦によるドイツ軍のソ連への侵攻と共に開始された。新たに獲得したソ連領の村々に、親衛隊と警察からなる小部隊が赴き、ユダヤ人の住民をその場で殺していったのである。前線の後方で行われたこの作戦の中心となった部隊は「移動殺戮部隊（アインザッツグルッペン）」と呼ばれ、主な殺戮の手段は射殺であった。だが、この方法は、手間がかかる上に、秘密の保持に向かず、執行者に与える精神的影響が大きすぎた。そのため、第二の作戦行動として、より大量に、よりすみやかに、犠牲者を隔離した状態で「処理」することのできる「ガス室」への移送が制度化されていったのである[10)]。

ホロコーストと言えば「ガス室」や「収容所」のイメージが強いが、ガス室を備えた収容所での死亡は、全犠牲者のうちの50パーセント程度であり、「射殺」による犠牲者は約25パーセントにのぼる[11)]。「ガス室」という巨大な殺人装置が備えていた恐るべき「効率」のことを思うならば、ひとりひとりを撃ち殺していくという伝統的な方法によってもなおその半数の死者が出ていたということは、「射殺によるショアー」がどれほど広範にわたって、大規模に、組織的に繰り広げられたものであったかを物語っている。

だが、歴史家たちを別にすると、絶滅過程の起源であり、ホロコーストの前半部を占める「移動殺戮部隊」の存在は、その重要性にも関わらず「ガス室」ほどは一般に認知されてこなかった。その大きな理由としては、移動殺戮行動の犠牲となった村や町がウクライナ、ベラルーシ、バルト三国、ポーランド、ルーマニア等、「東」側に広がっていたためである。戦後、ガス室や収容所に関しては「西」側の生還者や移送者たちによる数多くの証言がなされ、小説や映画でも繰り返し表象がなされてきたのに対し、「射殺によるショアー」は、その生還者も目撃者も、かつての犯罪の地も、すべて「東」側に存在したため、1989年に冷戦が終わるまでは、いわばその実態が「鉄のカーテン」によってブロックされていたのである。

このことをきわめて象徴的に物語っていると思われるのは、ホロコーストの記憶の継承にあたって決定的な役割を果たした金字塔的映画、クロード・ランズマンの『ショアー』（1985年）が「アインザッツグルッペン」のことを語っていないということである。2009年に放映されたドキュメンタリー映画『アインザッツグルッペン』を監督したミカエル・プラザンは、撮影開始にあたっ

てランズマンに電話をした際、ランズマンから『ショアー』における唯一の「心残り」は「アインザッツグルッペン」を撮っていないことだと告げられたと言う[12)]。前後編で三時間にわたるプラザンの『アインザッツグルッペン』は、ジャンルも手法もスタイルもまったく異なるものでありながら、まさに『ショアー』の後継・補完とも呼ぶべき決定的な作品である。『ショアー』が「ガス室」の映画であったとすると、プラザンはその二十年後に東欧の地に赴き『アインザッツグルッペン』を撮った。そしてフランス製作によるホロコースト・ドキュメンタリーは、ようやくその両翼をそろえたのだともいえるだろう[13)]。

フランス国営放送が2007年の初めに『アインザッツグルッペン』に撮影許可を出したのは、折しも、ジョナサン・リテルの『慈しみの女神たち』が二つの文学賞を受賞し、大きな話題となった直後であった。語り手のSS将校マックス・アウエは「アインザッツグルッペン」の隊員であり、その第二章には、移動殺戮行動の残虐さを語る克明な描写が続けられている。また、2007年には、ウクライナでの集団墓穴の調査・証言の聞き取りにもとづいた『記憶の保持者――射殺によるショアーの痕跡[14)]』が刊行され、著者であるパトリック・デボワ神父が「時の人」となった。デボワ神父は2004年に発足した東欧における集団墓穴の発掘・証言の聞き取りをおこなう機関YIU (Yahad-In Unum)の指導者であり、「射殺によるショアー」という語の生みの親でもある。

2012年に刊行されたマンガレリの『冬の食事』の執筆は、このようにして、長らくホロコーストの「忘れられた」一面であった「射殺によるショアー」および「アインザッツグルッペン」の実態が、フランス社会において急速に認知されるようになった時期にあたっている。また、ブラウニングの『普通の人びと』の仏訳がポケット版で再版されたのも2007年である[15)]。

ここで「射殺によるショアー」の大まかなイメージを略述しておきたい。いくつかの変更点はあったが、村や町を順番に「ユダヤ浄化済み」にしてゆくための手順は、ほぼ規格統一されていたのである。

移動殺戮部隊によって集められたユダヤ人の住民は、村はずれの森や林まで列になって歩かされる。村の男子の多くはすでにソ連軍に徴用されており、その大半は女性・子供・老人であった。あらかじめ掘られた死体溝のところまでくると、服を脱ぐように指示される。それから溝の前に並ばされ、首筋や背中から弾丸が撃ち込まれた。最初の一群が死体溝の中へと落ち込んでゆくと、次の一群が並ばされた。初めから穴の底に腹ばいに寝かされ、上から射撃がおこなわれるケースもあった。次の犠牲者は、最初の犠牲者の死体の上に、足の側

に頭を置くようにして寝かされる。それが五、六層重なったところで、穴がふさがれた。撃たれてもすぐに死に至らないケースも多く、穴が埋められたあとも、数日間は土が動いていたという[16)]。

『冬の食事』の背景は、間違いなく、この時期にポーランドでおこなわれていた移動殺戮行動である。新たに獲得したソ連領だけでなく、すでにドイツの占領下にあったポーランドでも、同様の方法でユダヤ人共同体が殲滅されていたのだ。

また、以上の記述は最低限のものである。移動殺戮部隊のその他の行為（放火、略奪、強姦、縊殺、刺殺、焼殺、爆殺、証拠隠滅等）について本稿でこれ以上述べないのは、『冬の食事』で問題になっているのはあくまでも「射殺 fusillade」のみだからである。現実にはつねに無限のヴァリエーションがある以上、いかなる史実を背景とする物語であれ、フィクションの登場人物である彼ら三人を「射殺」以外の具体的な行為と関連づける権利は論者にはない。厳密にいうならば、本文には「溝 fosse」という単語すらもでてこず、またそれを暗示する記述も存在しないため、以上のような「手順」の略述すら、わずかに違反である。だが、死体溝のイメージを知らないかぎり「射殺によるショアー」を知ったことにはならないため、ここでは必要と判断した。だが、後述するように、彼ら三人が「死体溝」を眼にしていたのだと断定できる材料がテクストには存在しないことこそが、本来はより重要である。本文に存在するのは「その日は百人くらいいた」「ふたりは森の中の空地でうつぶせになった」（119）という、ふたつの記述のみである。

彼ら三人が、次の春にガリツィア（ポーランドとウクライナをつなぐ地域）に移動していた、という回想部の記述から考えるならば、舞台はポーランド総督府領のどこかであろう。時期については 1942 年から 1943 年の可能性が高いが（ガス殺が始まってからも射殺はおこなわれていた）、はっきりとしたことはわからない。1942 年 1 月のポーランドは氷点下 20 度を記録していたというから、あるいは 1942 年の冬かもしれない[17)]。

また、移動殺戮部隊の特徴の一つは、人手不足を補うために、「治安警察」からなる警察大隊が投入されていたことでもある。彼らは SS ではなく、一般のドイツ人であり、また年齢を理由に「予備兵」となっていた者も多かった。「予備兵」ということは、それまでの戦闘経験がないということであり、SS のように殺人者になるための特殊訓練を受けていたわけでもなかった。そのような一般庶民が、いわば不意打ちのようにして、突然、無防備な民間人を至近距離から撃ち殺す仕事を命じられたのである。

『冬の食事』の三人もまた「予備兵」（12）であり、「四十歳」（87）程度である。だが、2004年に第一次大戦を背景とした『四人の兵士』という作品を書いているマンガレリは、『冬の食事』のドイツ兵を「兵士 soldat」と名指すことを、おそらくは意図的に避けている。彼らは「射殺者 tireur」（119）であるが「兵士」ではない。彼らは「敵」と戦っている「兵士」ではないからだ。戦時下であるのをいいことに、ユダヤ人を「敵性分子」と定義し（ユダヤ人は皆パルチザンである、ユダヤ人とボルシェヴィキは結託している、ユダヤ人はドイツ民族の敵である）、戦時下の「兵士」が「敵」を排除するのはなんといっても当然のことであるとして、国防軍や治安警察の兵士たちにまで殺戮の根拠を与えたのはナチのプロパガンダであり――また実際にそれは非＝ナチ戦闘員がユダヤ人を殺戮することをより容易にするものだったが――、現実はそうではなかったからである。彼らは、前線のずっと後ろで、ただ兵士の「制服」（53）を着て、ユダヤ人を殺しているだけだった。

4.「人間」であるということ

『冬の食事』に書かれているのは、殺戮の残酷さそのものではなく、その影響である。三人の「気鬱」はすでに限界であり、夜も悪夢に悩まされ続けている。彼らの「司令官」もまた、殺戮のためにひどく老けこみ、「やせて、よく途方に暮れていて、僕たちよりも先に病気になるのではないかと心配なほどだった」（12）。マンガレリは、彼らが射殺を嫌悪しているということを書き、そしてただそれだけを書く。つまり、その嫌悪感が生理的なものなのか道徳的なものなのか、あるいは宗教的なものや政治的なものなのかをはっきり特定できるような書き方をしない。また、殺戮を嫌悪するからといって、彼らが「善人」であるかのような書きかたもしていない。

ユダヤ人を大量に殺しているはずの彼らの会話は「エンメリッヒの息子が喫煙をしないようにするためにどうすればよいか」という、あからさまに――だからこそ――深刻さを欠いたものであるし、語り手は申し出を聞き入れてくれた司令官への「恩」と「感謝」のために、かたちだけでもユダヤ人を探すことを当然だと考えている。そして、凍える寒さの中を歩き続けて、エンメリッヒが雪景色の中にわずかな徴候を認めたおかげで、ついにひとりのユダヤ人を見つけ出したときには、まさか見つかるとは思ってもみなかっただけに、喜びをおさえられないのだ。

彼らは「良い人間」でも「悪い人間」でもなく、ただ「人間」である。マンガレリはジャッジをしない。批評もしない。ただ彼らを見つめ続ける。そして

寒さや、食べることや、めまいや、疲労といった生理的な要素に、心理的な要素と同じほどの重要性を認めている。そもそも、なぜ彼らは「三人」なのだろうか。語り手を「中庸」として、あらゆる面でエンメリッヒとバウアーが対照的なのは明らかだとしても（それはもちろん「善」と「悪」ではない）、ふたりのことを語ろうとすると、ひどく困難なことに気がつく。

なぜならそこには、ただ彼らが何をしたか、何を言ったか、いつ微笑をして、いつ黙り込み、いつ視線をそらしたかということだけが、注意深く、単純な言葉で重ねられているばかりだからだ。マンガレリの本を読んだ後では、たとえばエンメリッヒについて、気が弱いとか、素朴だとか、穏やかだとか、すこし間が抜けているとか、そんな形容詞を使うことが、どこか場違いで、賢しらな、品のない行為のように感じられる。そのような形容詞は、たとえある程度まで妥当なものだとしても、すでに批評であり、限定であり、エンメリッヒを対象化することにしかならないからだ。マンガレリの小説は、むしろ誰かについて「答え」を出したり、そのひとのことをわかったような気になったりしないという姿勢を徹底することによって成立している。だから我々は、ある心地よい無力感と共に、エンメリッヒはエンメリッヒなのだ、と繰り返すことしかできない。

バウアーも同じである。彼について荒っぽいとか、粗暴だとか言うことはたやすい。だが、そんなことよりも、彼はまず、池に氷が張っているのを見ればその上を歩かずにいられない男であり、葦を折らずに踏み分けて歩く感覚に喜びを覚える男である。そして池の真ん中まで行って、銃床で幾度もひびを入れて氷を散らしては「底まで凍ってるぞ」とふたりに向かって叫ぶのだ。柔らかな雪の中に腰をおろしたあとでズボンが冷えてしまったと言って騒ぎ、品のない冗談でエンメリッヒをからかっては、笑いがこらえきれずに震えだす。我々は、その震えがベンチをつたって語り手のところにつたわってきたことまでを知るのだ。

バウアーは語り手と共に、エンメリッヒの気がかり（息子の喫煙をいかにやめさせるか）に根気よくつきあってやる男でもある。だが問題は、「決まりだな、今日から俺たちがお前の息子のおじさんになる」（98）と出し抜けに宣言をするバウアーが、同時に、ユダヤ人が逃げ出した場合に誰が撃つのかという問題がもちあがった際に「誰がやったって同じだろ。だったら俺がやる」と「上ずった声で」引き受けるバウアーでもあるということだ（45）。

ユダヤ人を逃がさずに部隊まで連れ帰ること。それは、三人にとって、ただ当然のことであった。そこに変化が起こり、迷いが生じるのは、帰り道の空き

家の中での「食事」のためである。この小説の三分の二以上は、その薪も調理道具も水もない空き家の中での、果てしなく困難で手間のかかる「食事」の支度と、その食事の「分配」のドラマにあてられている。彼ら三人に加えて、犬を連れたひとりのポーランド人の猟師が参入し、そして最後にはユダヤ人までが熱いスープを口にすることになる。そして食事が終わる頃になって、エンメリッヒが言うのだ。「やっぱり置いていくことにしようよ」(125)。

だが、ここで重要なのは、彼らがユダヤ人をテーブルに招いたのも――その致命的ともいえる「エラー」のために――彼を逃がすという可能性が浮上したのも、そのユダヤ人に対する「同胞愛」や「憐憫」からなどではまったくない、という点である。

この本の裏表紙には、ポーランド人猟師による執拗なユダヤ人差別を目の当たりにして、彼らのなかに突如としてユダヤ人への「友愛」が芽生えたかのような「解説文」が印刷されているが、「友愛」という言葉からこの物語を理解しようとすることは、マンガレリの危険な賭けを台無しにすることである。そもそも、それほど安直な反動によって義侠心が芽生えるくらいならば、彼らが延々とおこなっている「食事」の支度には何の意味もなくなってしまう。

ユダヤ人がテーブルに呼ばれたのは、単にバウアーが、ポーランド人の剥き出しの差別意識に嫌悪感を覚え、ユダヤ人と一緒に食事をとらせることによってその食欲を失わせようという「嫌がらせ」を思いついたためである。ユダヤ人自身にスープをふるまおうという心遣いからではまったくなく、また、共に食事などをとったら、自分たちまで「もう彼を殺せなくなってしまう」(121)と言って、語り手はバウアーに反対さえしている。

ポーランド人猟師がみせる反ユダヤ差別は『冬の食事』に描かれているもっとも醜いものである。その根深い反ユダヤ差別は、三人のドイツ兵自身にはそのようなものがあったわけではないことを示すための参照点となっているが、単なる参照点に留まるものでもない。この時代のポーランドにおいて反ユダヤ差別が根付いていたことは否定しえない事実であり（とくに農村部や森に逃げ込んだユダヤ人が生き延びられる確率はきわめて低かった)、いわばこの猟師もまた「普通」のポーランド人なのだ。差別感情という一点の瑕疵――象徴的には「ぼろぼろに歯の抜けた口元（87)」――をのぞけば、彼は堂々としていて気品さえ備え、彼の歯並びは、初め、それ自体としては、その気品を乱すものではないとされていた（差別意識は歴史的な産物でもありうる)。だが、物置の隅に閉じ込められているユダヤ人の姿を認めたとたん、ポーランド人の口元が醜くゆがみ、その笑みを見た瞬間からその歯並びが「おぞましいもの (94)」

と見えてくるのである（差別感情が「態度」になって現れると耐え難いものとなる）。

スープの分配にあたって、ポーランド人の歯の抜けた口元への嫌悪感は、彼の差別的態度にも増して決定的な役割を果たしている。同じように、この小説の最大の鍵であるユダヤ人を逃がすという可能性もまた、心理的な判断というよりも、もっとずっと小さな、限りなく具体的な一連の出来事の結果として発生している。我々は目を凝らす。「分岐点」はどこにあったのか。ニット帽をぬがせたことか。それとも物置のドアを薪にしたことが決定打だったのか。だが机があんなに頑丈でなければ。いや猟師の蒸留酒が。やはり煙突の詰りか。煙草か。落とし戸か。スプーンか。犬か。

そこではあらゆる細部が緊密に連動しあっており、安易な人道主義的な読みを許さない。たとえば、エンメリッヒがそんなことを言いだしたのが、あくまでも、自分自身の身体が温まり、空腹が満たされたときであることは重要である。

また、マンガレリはこのユダヤ人を、あたうかぎり消極的に記述している。見つけ出されたときから、彼は終始一貫して、無言、無抵抗、無気力である。ニット帽の下の疲れた目にはまだ「はっきりとした輝き」（39）があるが、そのまなざしには「恐れも、絶望も、なにひとつ読み取れなかった」。テーブルに呼ばれてからも「その目には、意味も、なにも読み取れなかった」（124）。彼ら三人が、そして読者が、このユダヤ人に対してなんらかの個人的な好感を抱くきっかけとなるようなものは、極力排除されているのである。

ただし、このユダヤ人にはたったひとつ、語り手の気持ちを乱すものがあった。それは彼の個性ではなく、彼のニット帽に「刺繍」されていた一粒の「雪の結晶」（40、75、81、82、122）である。語り手は「ユダヤ人たちの洋服のなかにそういうようなもの」すなわち「刺繍や、色つきのボタンや、髪に結ばれたリボン」（82）などを見ると、刺し貫かれるような苦痛を覚えるのだ。

ここでもまた、マンガレリは、極度の情報の制限と、その制限にも関わらず、やはりある具体的な史実への送り返しを一気におこなうという手法を使っている。というのも、犠牲者のなかに確かに――殺戮行動のごく初期には犠牲者がユダヤ人の成人男子だけだったこともあったが――女性や子供が含まれていたということが、この「髪に結ばれたリボン」（82）の一語からわかるためである。さらにそこで「母親の気遣い」が喚起されていることから、読者はそれが少女であったことを知る。だが何歳の人間にも母親は存在し、マンガレリはこの「母親の気遣い」が子供のみに向けられたものだとも言っていない。また、

複数形の「ユダヤ人」が代名詞ではなく、はっきりと des Juifs によって示されているのは――ただし主格でも目的格でもなく所有格である――小説全体のなかで、ただこの一カ所のみである。マックス・アウエならば「女性や、それ以上に子供たちの場合、わたしたちの仕事はときに非常に困難で、胸を抉られるようなものとなった[18)]」と表現するような加害者の「弱さ」（40）を、マンガレリの語り手は、言語表現上に生じたわずかな偏差―― en から des Juifs への移行――によって示している。ユダヤ人のニット帽に刺繍された「雪の結晶」を、語り手はなるべく見ないように、目をそらしている。

5. 雪景色と雪の結晶

大量殺戮の恐ろしさは、その死者の数が膨大であることではなく、その大量の死のなかに「ひとりひとりの死」がないことなのだと、かつて石原吉郎は語った[19)]。ジェノサイドをただ「量の恐怖」としてのみ想像してはならない。それは大量殺戮を起こした者たちと同じ罪をおかすことである。

雪道を歩きながら、もしユダヤ人が逃げ出した場合、どうするのかと気にする語り手に、「ひとり増えようが、ひとり減ろうが、なにが変わるっていうんだ」とバウアーは言い、「なにも変わらない、ということが僕たちにはもうわかっていた」（45）と語り手は続けていた。すでに大量のユダヤ人を殺してきているために、「ひとり」の生を重く見ることが困難になっているのだ。ちょうど、上官のグラーフから明日の「仕事」の告知をされ、解散が命じられた際に、外の厳しい寒さにも関わらず――あるいはまさにその寒さのために――そこから動けなくなっていた時のように。

> 外に出ないためなら何をしたっていいと、さっきはあれほど思っていたのに、僕たちは暖かい部屋の中にもどろうとしなかった。それは、明日の仕事のことを考えていたためだったのかもしれないし、あるいは、すでに芯まで冷えきってしまっていたために、あと数分寒い思いをしたところで、もう、たいしたことではなかったからなのかもしれない。（10）

この一節は、おそらく象徴的に、というよりかむしろ構造的に『冬の食事』全体を映し出している。すなわち、外に出ない（＝射殺をしない）ためなら何をしたっていいと思っていたはずの彼らは、しかし「暖かい部屋の中にもどろう」（＝ユダヤ人の命を救おう）とはしなかった。それは、まさしく明日の仕事のことを考えていたためであり（＝彼を逃がせば明日また射殺をすることに

なる)、また、すでに芯まで冷えきってしまっていたために（＝すでに大量に殺しすぎていたために)、あとすこし寒い思い（＝さらにひとりを殺すこと）をしたところで、もうたいしたことではなかったからである。

エンメリッヒの提案は退けられ、自らの「意に反して」多くのユダヤ人を殺してきていた彼らは、結局「自分の意志で」ひとりのユダヤ人を死に追いやることになる。彼を連れて帰れば、彼らはその報償として、翌日また「狩り」に出ることができるため、そのユダヤ人を殺すのは、彼ら自身ではない。彼らがただひとつ気にかけていたのはそのことだけ、すなわち「自分」が手をくださない、ということだけである。

このことを予兆的に物語っているのは、強制労働用のユダヤ人とのあいだに生じた「秋の初め」(118）のエピソードである。バウアーと語り手は、ふたりの「洗濯係」のユダヤ人と顔見知りになっていたが、彼らに殺される順がまわってきたとき、ちょうど自分たちが殺すめぐりあわせになってしまう（このパッセージでのみ、ふたりのユダヤ人 deux Juifs を受けて、代名詞「彼ら ils」が使われている)。とっさに隣の射殺兵に位置を「交換」してもらうことを考えるが、すでに時遅く、彼らは自分たちの手で「洗濯係」を殺すことになる。だが、仮に撃つ役を「交換」できていたからといって、どうだったというのか。ふたりは別の射殺兵の銃弾によって、一瞬のちには絶命したのである。それでも人間は「顔」を知る人間を殺しかねる。そしてその「十月」(119）以降、彼らはユダヤ人との人間的な関わりを持たないようにしていたのである。

『冬の食事』は「人は人を殺すことを嫌悪する」というどこまでも「人間的な」理由のために、さらに「ひとり」の人間を殺すことになってしまう人間の物語である。またそれは、自分が手をくだすのでなければ、そして「顔」を知る相手でなければ、人はどれほど人の死をたやすく耐えることができるか、ということでもある。人を殺すということは、道徳や倫理の問題である以上に、時に、生理と手段の問題である。

人を大量に殺そうとするナチのような組織は、その事実を熟知しているため、そのことを利用する。ガス・トラックが考案されたのは、銃殺では兵士の神経がもたなかったためである。次いでガス室が生み出されたとき、ナチはそれを稼働させるために、ユダヤ人自身にユダヤ人を殺させるシステム――「ナチの最も悪魔的な犯罪[20)]」（プリモ・レヴィ）――を完成させた。その意味で、「人を殺すことに耐えられないという理由から、より多くの人を――それがたったひとりであっても――殺すことになる」物語『冬の食事』は、ホロコーストの犯罪をそのたびに「進化」させてきたある決定的な――きわめて「人間的」な

――要素を象徴的なレベルで語った物語だともいえるだろう。

6.「できるかぎり人間的なこと」

ユダヤ人を逃がそうと考えたエンメリッヒが「一回はやったんだ、と思えるじゃないか」(129) とふたりを説得しようとするとき、それは自然で、正直で、もっともな理由のように思われる。そうだ、逃がしてやれ、それでユダヤ人も救われ、あなたたちも救われるではないか、と。だが、そこには「ひとり」を救いさえすれば、「のこり」に対する罪から救われるはずだという、途方もなく利己的な見通しがひそんでいる。「いつか、このことを思ったら、気持ちがらくになるよ」(129)「夜、夢をみたときにも、思いだすことができるんだ」(129)「ねえ、バウアー、僕はいつかこのことが必要になるんだよ」(134) とふたりを説得するエンメリッヒは、「ひとり」は救ったのだ、という事実を作り上げることによって、自分の過去の罪を贖い、未来の自分までを救おうとしている。

「俺はだめだな。ひとりじゃ足りない」(134) と言って、ユダヤ人を逃がすことに反対したバウアーは、「ひとり」を救うことによって、そのほか「すべて」への罪の意識から軽くされようとすることそれ自体を受け入れない。「ひとりがなんだっていうんだ」と呟くバウアーは、エンメリッヒのように「明日また殺したっていいから」(134) と考えることはできない。バウアーとエンメリッヒはどちらも同じほど射殺を耐え難く思っているが、バウアーはそれゆえにすでに自分が救われえないことを感じており、エンメリッヒはそれゆえに自分を救おうとする。実際、ひとりの具体的な、「顔」の見える人間を救うという行為には、エンメリッヒが期待したとおりの、「そのほかすべて」への罪の意識を掻き消しかねないほどの、じつに圧倒的な浄化作用がある。

ラウル・ヒルバーグによれば、戦犯裁判が始まったとき、絶滅計画を執行した官僚たちのなかに、知り合いのユダヤ人を一人救ったとか、あるユダヤ人夫婦の力になるために自分の影響力を行使したとかいうことを証明できない被告はほとんどいなかった。そのような「良い行い」は、自分はユダヤ人を個人的に「憎んでいる」のではなく、あくまでも義務を遂行しているのだと考えるために「必要」な道具であり、彼らの「後ろめたさ」をやわらげるために「絶大な効果」を発揮した。そして彼らは「《できるかぎり人間的なこと》をしたあとで初めて、落ちついて絶滅行動に専心できたのである[21)]」。

あらゆる加害者が思いつく、限りなく安直な救済の可能性を、バウアーは受けつけなかった。そもそも、逃がそうとさえ思えば、このうえなく簡単に逃が

すことのできるユダヤ人を「逃がした」からといって、彼を「救った」などと本当にいえるのだろうか。「今晩からだって、らくになるんだ」（134）と言うエンメリッヒは、その晩、そのユダヤ人をふたたび待ち受けているのがいかなる環境であるかに思いを馳せたのだろうか。だが、それならば実はバウアーこそが高潔な人物であり、彼の選択こそが「正しかった」のかといえば、もちろんそんなことはありえない。彼らは、結局、ユダヤ人の犠牲者リストに「ひとり」を「追加」したにすぎない。

「自分でみつけておいて、あとからめそめそされたってなあ」（134）と言うバウアーに、エンメリッヒは「ちがう、ちがう、ちがう！」と必死に繰り返すが、それ以上言葉を続けることができない。林にかかる霧氷の量のわずかな変化に目をとめ、率先して雪原をわたり、ユダヤ人を見つけてしまったのは自分なのだ。「狩り」であれ「射殺」であれ、根底ではまったく同じであったことに、エンメリッヒは気がついていなかった。

彼らはすでに、どこにも出口などない、絶対の暗黒のなかに身をおいていた。そしてこの出口のない中で、語り手は、エンメリッヒの意見のほうを選んでやりたいと強く思いながらも、最終的に、やはり「ひとり」による救済の可能性を信じることができず、バウアーの意見を選択する。この語り手の身ぶりは、おそらくそのまま、小説家としてのマンガレリの身ぶりと重なっている。マンガレリは「ひとりのユダヤ人を救った心優しい三人のドイツ兵」という物語を決して受け入れないことによって『冬の食事』を書いた。その時、この小説がメタレベルで厳しく問いかけているのは、果たして我々は、例外的な少数者が、例外的な加害者によって救われる「ホロコーストのお伽話」を好んではいなかっただろうか、というものである。

7.「普通の殺戮者」

教育者ジャン＝フランソワ・フォルジュは、この世で考えうる最も猥褻なことは、ある日SSにむかって「わたしはあなたを理解する[22)]」と口にすることだと語り、ホロコーストに関しては「すべてを理解してしまおうとしないように気をつける必要がある[23)]」と述べる。クロード・ランズマンもまた「理解するという計画には、まさしく絶対に猥褻なところがある」と言い、「なぜ」を問わないことによって『ショアー』を撮った[24)]。幼少期に「射殺によるショアー」を生き延びたヘブライ語の作家アハロン・アペルフェルドが、自分にとっての殺戮者はただ「悪魔」であり、自分は「悪魔」と関わり合いになることは一切したくないのだと言う時、我々はただそれに頷くことしかできない[25)]。

だが、一方で、ロベール・メルルが『死は我が職業』の序文で述べたように「やったのはドイツ人なのだ」と言って人種差別に逃避したり、「これは悪魔の所業である、人間のすることではない」として形而上的な恐怖に打たれているだけでは、現実から目を背け続けることになる[26)]。それは、確かに我々と変わらない「普通の人びと」によって行われたのだ。つまり、すべては可能なのだ。だからこそ我々は警戒を解いてはならないし、そのようなシステムの再来を許してはならない。

ブラウニングは、殺戮者を理解しようとする試みが不可避的に彼らへの「感情移入」を引き起こすことを認めている。「だが、私が認めることができないのは、説明することは正当化することであり、理解することは赦すことであるという使い古された紋切型である[27)]」。

それでも『冬の食事』の三人を「理解」すること――むしろ単に「知る」こと――は、やはり猥褻なことなのだろうか。この不安な問いは、おそらく、ずっと持ち続けていてもかまわない種類の問いである。「エンメリッヒとバウアーと僕は、最後だった」(8) という集合の際の彼らの位置からわかるように、三人は殺戮者たちの最後列におり、マンガレリが突き進もうとしたのが、加害者と被害者という単純な二項対立が溶解する究極の「グレイ・ゾーン[28)]」(プリモ・レヴィ) であることだけは確かだからだ。『冬の食事』は、我々を決して安心させることなく、思考を強いてくる物語である。だが、それは少なくとも、加害者サイドからの例外的な救済の物語によって――その「絶大な効果」によって――不安を慰撫され、人類の「善良さ」に「安心」すること――ナチの官僚たちが恃んだ「やましさの解消法」に同調すること――に比べたら、よほど猥褻なことではないはずだ。

ブラウニングの『普通の人びと』やスタンレー・ミルグラムの『服従への心理』は、「良い人間」と「悪い人間」があらかじめ存在するわけではないのだということを我々に深く納得させるが、一方に「良い」選択をしたものたちがおり、もう一方に「悪い」選択をしたものたちがいるという図式は――ことの当然として――崩れない。そのため、我々はブラウニングの著作における殺戮の証言の主体を、すでに「一線を越えてしまったもの」たちとして眺めることになる。「なぜ彼らは凶悪な殺戮者になってしまったのか」という問いは完全に正当なものではあるが、同時に、「凶悪な殺戮者」と表現してしまった時点で、我々は、自分ですら彼らになりうるのだという想像力を、どこかで、一部分であれ、奪われてしまう。彼らは「普通の人びと」であったが「凶悪な殺戮者」になってしまった人びとであり、そして、そうなってしまった時点で、彼

らに同一化しまいとする心理的なブレーキがかかるのだ。マンガレリが、アインザッツグルッペンによる移動殺戮行動というこのうえなく凄惨な史実を素材としながら、凶悪さや残虐さを直接的に喚起する描写を避けたのは、そのためである。それをした瞬間に彼らは「悪魔」として同定されてしまうからだ。

ブラウニングの研究は、いかにして「普通の人びと」が「凶悪な殺戮者」になるのかを考察したものであり、我々は、自分もまたそのプロセスをたどりかねないことに戦慄を感じながらも、なおそこに描かれている残虐行為の主体に——まさにそれらが残虐でありすぎるために——同一化しないことが許されている。それに対して、マンガレリがおこなったことは、ある意味で、ずっと手加減のないことである。マンガレリは、本当に「普通の殺戮者」を描いてしまったからだ。

8. 一歩前

では、殺戮者にならないためには、どうしたらいいのだろうか。

ジャン=フランソワ・フォルジュは、目撃者と殺人者へのランズマンの問いかけがすべて最初の時の感情と反応に触れたものであることを指摘している(「非常に詳しくですよ。とても大事なことですから」)。「そしてこの〈一回目〉のあとでは、困惑や後悔などなく、慣れがあるだけだった。〔…〕「犯罪を行なっても、道徳意識のなかで嫌悪感が増大することはない。むしろ犯罪はすべての価値を破壊し、無化してしまう[29]」。

「一回目」をおこなわない、という選択こそが、つねに、決定的に重要なのだ。

トラップ少佐が第101警察予備大隊に「列を離れてよい」と言ったとき、しばらくのあいだ沈黙が流れた。そして第三連隊の兵士シムケが一歩前に進み出た。シムケの上官は、自分の部下の中から真っ先に裏切り者がでたことに憤り、シムケに罵声を浴びせ、トラップ少佐がそれを黙らせた。

> トラップがシムケをかばったのを見てとると、10人から12人の者が同様に前に進みでた[30]。

この「一歩前」に出ることの困難さ、それこそが、ブラウニングの著作が明るみに出したものである。すなわち「戦時特有の残忍性、人種差別主義、職務の断片化と日常的手順、犯行者の特別選別、出世第一主義、命令への服従、権威崇拝、イデオロギー的教化、体制順応」に加えて、いかに集団への順応——

「同調圧力」――が中心的な力を果たしていたか。「それは軍服を着た兵士と僚友との根本的な一体感であり、一歩前へ出ることによって集団から切り離されたくないという強い衝動である[31)]」「列を離れ一歩前に出ること、はっきりと非順応の行動をとることは、多くの隊員の理解をまったく超えていたのであった。彼らにとっては、射殺するほうが容易であったのである[32)]」

ブラウニングの考察のもっとも人間的な、ほとんど小説的なところは、その順応への圧力がなぜこれほどにも強かったのか、ということを、どこまでも具体的に理解しようとしているところである。「列を離れることは、第一に、〈汚い仕事〉を僚友にやらせることを意味していた。〔…〕それは、僚友に対して自己中心的な行動をとることであった。撃たない者は孤立し、排斥され、追放される恐れがあった――異郷の地に駐屯し、敵意をもった住民たちに囲まれ、固く団結した部隊にあって、それはきわめて不快な見通しであった。心の支えや人間的な接触を、ほかのどこに求めることができただろうか[33)]」。

戦地や占領地にあって人を殺戮者にしてゆく要因をブラウニングは、人間が別の人間とのつながりを求めるという――これ以上なく「人間的な」――ことの中に探りあててしまう。そして、その上でなお、それが「正当化」や「赦し」ではありえないことを確言する。

> 警察予備隊員は選択に直面し、多くの隊員が恐ろしい行動にコミットした。とはいえ、殺戮した者は、同じ状況に置かれればだれでも自分たちと同じことをしただろうとして、免罪されることはありえない。なぜなら、同じ大隊員の中にさえ、幾人かは殺戮を拒否し、他のものは後から殺戮をやめたのであった。人間の責任は究極的には個人の問題である[34)]。

『冬の食事』にも、シムケのように、殺戮を拒否した人物がいた。クロップである。上官のグラーフと仲間ふたりを別にすれば、名前で登場しているのはクロップだけであり、登場回数は少ないが、『冬の食事』の要石のような存在として、決定的な印象を残す。

クロップは英雄ではない。彼は、仲間に不服従を呼びかけるわけでもなく、ユダヤ人のために何かをしたわけでもない。ただ彼は、最初の射殺のときに「俺は、これはやらない」(64) と言っただけだ。そして森を出ていって、どんな仕事でもいいから他のことをやらせてくれ、とにかく、自分は、これはしない、と言った。その晩、クロップは、仲間からの攻撃と非難を浴び、上官のグラーフには殺されかねないほどだった。だが、「司令官」が間に入った。クロ

ップを「料理番」と交代させたのである。「料理番」というポジションが、このような状況において考えうる限り最良のものであることはいうまでもない。銃殺の仕事を免れるだけでなく、飢える心配もなくなり、食事の配分量が彼の手つきひとつにかかっているとなれば、同僚からのあからさまな攻撃からも守られることになる。

だが、それは結果にすぎない。肝心なのは、拒否の言葉を発することによって、いかなる結果が待ちうけているかをまるで知らなかった時点で、彼が「俺は、これはやらない」と言ったことである。しかも『冬の食事』では、シムケのように、選択権が与えられたわけでもなかった。それでもクロップは「一歩前」に出た。あるいは「一歩横」に。

しかし、と人は思うかもしれない。これはフィクションだからクロップは許されたのであり、現実のファシズム体制下でそのような行動を取る者は、自分の命を危険にさらすことになるのではないか、と。ところが、数々の社会学・歴史学の著作が教えているのは、まさにその反対のことである。ナチのような体制下においてさえ、民間人を処刑することを拒否したという理由から死刑になった者は皆無であり、百を超えるケースを検討した研究によると、厳しい処罰を受けた者すらほとんどいなかったのである[35)]。

それにも関わらず「一歩横」に出る人間が少ないのはなぜだろうか。ブラウニングの著作も、ミルグラムの心理実験も、彼らのような人間がごく稀であったことを告げている。教育者であるジャン=フランソワ・フォルジュは、ヒューマニスティックな教育における野心は「この割合をより稀でないようにしていくこと[36)]」にあると結論している。これは、当然のようでいて、実は、ある新しい可能性に開かれたものである。というのも、我々は「加害者」に対立するものとして「レジスタンス」や、ユダヤ人を救った「正義の人」を想定することには慣れているが、シムケやクロップはそのどちらでもないからである。人類学者のフィリップ・ブルトンは、ここに『拒否者[37)]』というフィギュールを見出して、新たな光をあてている。彼らの多くは、拒否の理由を明らかにせず、資料や痕跡もほとんど残っていないため、きわめて目立たない存在である。だが、ヴェトナムでも、アルジェリアでも、ルワンダでも、近代史における大量虐殺の際には、常に、少数ではあるが、必ず、彼らのような「拒否者」が存在した。「拒否者」は、同輩からは「裏切り者」とみなされ、被害者からは加害者の「同類」、レジスタンスからは「卑怯者」とみなされる。だが、もしも誰もが「拒否者」になるならば、戦争も大量虐殺も起こらないのだ。

一歩横に出る人間と出ない人間をわけるものはなんだろうか。クロップもま

た、拒否の理由を明らかにしていない。「クロップは自尊心が強かった。意地の悪いところはないが、ひとりでいるのが好きで、ちょっとした非難にもすぐに気を悪くした」(64)。自尊心の強さが重要な要素ではあることに疑いはないが、語り手たちとの決定的な違いが「ひとりきり」にあることは明らかである。三人が森の中で射殺を始めることになったのは、極言するならば、彼らが「三人」だったからである。「三人」だったからこそ彼らは射殺の任務にも耐え、「三人」だったからこそユダヤ人を見つけて連れ帰ることにもなった（エンメリッヒひとりならばユダヤ人を逃がしており、語り手とバウアーだけならば、ユダヤ人を発見できない)。だが、それは彼らが「人間」であったということと、ほとんど等価である。雪の中でバランスを失って足を滑らせ、エンメリッヒとバウアーに体が触れる、その一瞬の腕や肩の量感にすら深い安堵感を覚えてしまうほど、語り手はただ「人間」であり、本質的なもろさを抱えた存在である。ならば我々もまた、どうしてそのような「本質的なもろさ[38)]」を抱えていないなどと言うことができるだろうか。

クロップのように「一回目」を回避できなかった三人は、その後、昼夜の別なく苦しむことになった。だが、彼らがどれほど暗い気持ちで苦しんでいたとしても、もっと絶対的に哀れなのは、ニット帽のユダヤ人である。そして、森のなかで死んでいった無数の――ひとりひとりの――ユダヤ人である。三人は冷酷で残忍なSSではなかった。だが、撃たれたユダヤ人からすれば、まったく同じことであっただろう。

悪意も憎しみもない殺意もない三人のドイツ兵に「捕獲」され、殺されることになったひとりのユダヤ人。彼への同情をかきたてるような記述をマンガレリが極度に抑制していることこそを思い出そう。彼が哀れなのは、彼が良い人間だったからでも、美しい人間だったからでも、若かったからでもない。彼が生きていたからだ。

彼は黒い煙にむせて咳き込んでいた。雪の上に座って目をこすっていた。こめかみが脈打ち、口元が震えていた。それ以外に我々が彼について知っていることは彼のニット帽に刺繍されていた一片の雪の結晶のことだけである。そして、その一片の雪の結晶よりも軽いものにされた彼の生命の上に、この大量の雪の物語『冬の食事』のすべての言葉はのせられている。

9. エピローグ

人はおそらく、自分が愛するもののためにしか本当には動くことができず、自分が愛するものを通してしか、本当にはなにかを理解することができない。

エンメリッヒがユダヤ人を逃がそうと思ったのは、自分の空腹が満たされたときであり、自分の未来を救おうとしたためでもあったが、それはまた、その若いユダヤ人の中に自分の息子の姿を見たからでもあった（135）。そしてそのことを悟った語り手が、ユダヤ人を逃がす可能性を検討し、のちにそうしなかったことを後悔するのも、そのユダヤ人自身のためではなく、ただ友であるエンメリッヒのためであった。

この小説の中では、彼らに殺されていったユダヤ人たちの死は――「悲しみをたたえた目」（119）で一瞬こちらを見てから死んでいった「洗濯係」の死ですら――結局は、どこまでも抽象的なものにとどまっている。ユダヤ人たちの死については、空き家の煙突をつまらせていた凍った猫の死骸ほどの言葉すら費やされていないのだ[39]。この本のなかで唯一具体的に語られているのは、ガリツィアの橋の下で大量の血を吐きながら死んでいったエンメリッヒの死だけである。そんなことになるのだと、もしあの時もし知っていれば、という語り手の回想は、全編を貫きながら、四度にわたって挿入されている（22、34、76、136）。エンメリッヒもまた、一発の弾丸に撃ちぬかれて死んだ。そして、語り手とバウアーは――すでに大量の血と大量の死を見てきていたはずの彼らは――そのとき初めて、弾丸に撃たれて死ぬということがどのようなことであるのかを理解する。あるいはそれが理解というようなものを超えたものであることを真に理解する。「まるで僕たちまでが弾丸に撃ち抜かれてしまったかのように」ふたりはただ茫然としてひざまずき、血を吐いて死んでゆくエンメリッヒから目をそらさずにいることしかできない。「何ひとつしてやれず、最後まで、ひとことも言えなかった」（22）。

どのような方法で何人の人間を殺そうと、どれほど多くの人間の凄惨な死を目にしようと――ましてそれが膨大な数であるならば――、我々はひとりの愛する人間が目の前で死んでゆくことほどには、何ごとも理解せず、真に苦しむこともできない。

それがどれほど酷薄な、身勝手な現実であるとしても、だからこそホロコーストは起こりえたのだし、だからこそホロコーストは今後もまたいつでも起こりうるものなのだ。だが、まさにその現実の中にこそ、あるいは一縷の希望もまた秘められているのだと考えることも、我々には許されるだろうか。エンメリッヒの死は、語りの地点を別にすると、物語の時系列としては最終地点にあたっている。その後のことは何ひとつわからないのだ。わかっているのは、その瞬間にも、それ以降にも、ユダヤ人の絶滅計画は進行していたということだけである。エンメリッヒを失ったあと、語り手とバウアーは、果たしてふたた

び殺人者として銃を手にしたのだろうか。

季節はすでに春であり、ガリツィアの橋の上には、烈しく暖かい春の雨が叩きつけるように降りそそいでいる。

註

1）Hubert Mingarelli, *Un Repas en hiver*, Stock, 2012, P137, p. 23。以下、本作品の引用頁は文中に括弧で示す。

2）Christopher R. Browning, *Nazi Policy, Jewish Worker, German Killer*, Cambridge, Cambridge University Presse, 2000, p. 32.（ロバート・イーグルストン『ホロコーストとポストモダン』田尻芳樹、太田晋訳、みすず書房、二〇一三年、I 頁の引用による）。

3）Jan Karski, « Les dirigeants du monde libre connaissaient la vérité sur l'extermination en 1943 », *Les Cahiers historiques*, 1982, dans Jean-Louis Panné, *Jan Karski, le « roman » et l'histoire*, Saint-Malo, Pascal Galodé, 2010, p. 119.

4）ラウル・ヒルバーグ『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』望田幸男・原田一美・井上茂子訳、柏書房（新装版）、二〇一二年、下二三八 - 二六九頁「加害者」。ヒルバーグは「心理的問題」に関して五段階の抑圧メカニズムと、二種類の合理化（絶滅過程の正当化、個人的関与の正当化）を挙げている。

5）1941 年 8 月半ばのヒムラーのミンスク訪問とそれに続くガス・トラックの考案についてはヒルバーグ『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』、前掲書、上二五五頁、下二六四頁。

6）Christopher R. Browning, *Des Hommes ordinaires*, nouvelle trad. par Pierre-Emmanuel Dauzat, Tallandier, coll. « Texto », 2007, p. 237.（クリストファー・ブラウニング『普通の人びと』谷喬夫訳、筑摩書房、一九九七年、二六八 - 二六九頁）。

7）*Ibid.*, p. 275. 二六九頁。

8）« Dialogues, 5 questions à Hubert Mingarelli ».www.librairiedialogues.fr 5. マンガレリはこれに続いて、このような書き方は歴史家に「随伴する」ようなものであり、歴史家の視点と小説家の視点のどちらもが興味深いものだと述べている。

9）『冬の食事』が「書かない自由」を最大限に活かした小品であるとすると（歴史的背景の了解は読者次第であり、ある一日のうちにひとつの場所で展開する「古典悲劇」方式）、そのちょうど対極にあるのが、「教育的な配慮」を思わせるほど具体的な情報に満ちた『慈しみの女神たち』のような大部の著作である（架空の主人公が歴史上の有名な人物に出会ったり、各地を遍歴したりしながら、1941 年から 1944 年までの歴史的大事件に次々と遭遇してゆくという「学習歴史漫画」方式）。

10）ヒルバーグ『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』、前掲書、第七章「移動殺戮作

戦」、二〇八頁以下。

11）Christopher R. Browning, *Des Hommes ordinaires*, *op. cit.*, p. 327, note 1.　それ以外は、ゲットー、労働収容所、移送、「死の行進」などの過酷な環境による。

12）2014 年 10 月 2 日パリ・ホロコースト記念館、ミカエル・プラザン講演。

13）この流れをさらに補強するかのように、ミカエル・プラザンはその後、ホロコーストの否定主義者をめぐる『歴史の改竄者たち』（2014 年放映）を作成している。

14）Patrick Desbois, *Porteur de mémoires : sur les traces de la Shoah par balles*, Michel Lafon, Paris, 2007.

15）「語らない自由」を行使するマンガレリのスタイルは、こうした記憶の継承の上に初めて成立している。またそれは、歴史家たちの仕事に対するひとつの応答のしかたでもある。マンガレリは「歴史（イストワール）」に関する情報を最小限に抑え、読者とのあいだに共有された「記憶」へと呼びかける。また同時に、その「記憶」の量や内容がどのようなものであれ、ひとつの「物語（イストワール）」として成立するような自律的なテクストを書こうとしている。

16）記述は主に次の著作を参考とした。ラウル・ヒルバーグ『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』、前掲書、上二四四頁； Georges Bensoussan, *Histoire de la Shoah*, PUF, 1996, p. 40-45 ; Georges Bensoussan, *Atlas de la Shoah*, Autrement, 2014, pp. 34 -37.

17）Georges Bensoussan, *Histoire de la Shoah*, *op. cit.*, p. 37.

18）Jonathan Littell, *Les Bienveillantes*, Gallimard, 2006, p. 161.『慈しみの女神たち』菅野昭正・星埜守之・篠田勝英・有田英也訳、集英社、2011 年、一一三頁。

19）石原吉郎「確認されない死のなかで――強制収容所における一人の死」『望郷と海』、筑摩書房／「アイヒマンの告発」『石原吉郎詩集』思潮社。

20）Primo Levi, *Les Naufragés et les rescapés* (1986), Gallimard, coll. « Arcades », 1989, p. 53.

21）ヒルバーグ『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』、同掲書、下二六四 - 二六七頁

22）Jean-François Forge, *Éduquer contre Auschwitz – histoire et mémoire*, 1997, p. 44. note 38.　ジャン＝フランソワ・フォルジュ著『21 世紀の子どもたちに、アウシュヴィッツをいかに教えるか？』高橋武智訳・高橋哲哉解説、作品社、2000 年、四二頁。

23）*Ibid*., p. 40. 四〇頁。

24）Cité dans *ibid*., « Il n'y a pas de pourquoi », pp. 189-191.　一九六 - 一九七頁。

25）« Interview de Aharon Appelfeld » dans Michaël Prazan, *Einsatzgruppen. Les Commandos de la mort*, France 2, 2009.

26）Robert Merle, *La Mort est mon métier*, Gallimard, 1952, p. II.　松村剛訳、講談社、一九七一年。

27）Christopher R. Browning, *Des Hommes ordinaires*, *op. cit.*, p. 33. 八 - 九頁。

28）Primo Levi, « La zone grise » *Les Naufragés et les rescapés*, *op. cit.*, pp. 36-68.

29）Jean-François Forge, *Éduquer contre Auschwitz*, *op. cit.*, pp. 206-207.　二一五 - 二一六頁。
30）Christopher R. Browning, *Des Hommes ordinaires*, *op. cit.*, p. 107. 九一頁。
31）*Ibid.*, p. 125. 一一三頁。
32）*Ibid.*, p. 270. 二六四頁。
33）*Ibid.*, p. 270. 二六四頁。
34）*Ibid.*, p. 275. 二六九頁。
35）David Kitterman, « Those Who Said “No”. Germans Who Refused to Execute Civilians during World War II », *German Studies Review*, no 11, 1988, pp. 243-254.
36）Jean-François Forge, *Éduquer contre Auschwitz*, *op. cit.*, p. 208, 二一六頁。
37）Philippe Breton, *Les refusants. Comment refuse-t-on d'être un exécuteur ?*, La Découverte, coll. « cahiers libres », 2009.
38）Primo Levi, *Les Naufragés et les rescapés*, *op. cit.*, p. 68.
39）ここに象徴的な意味を読み取ることは可能である。マンガレリの小説では、ほぼ毎作と言っていいほど、罪のない動物や小生物（蠅、魚、コバンザメ、ヤドカリ、仔猫、猫、老犬、馬）の死や殺害のシーンが描かれてきている。

＊本稿は、國分俊宏（青山学院大学教授）を研究代表者とする共同研究平成 26 年度科学研究費助成事業「基盤研究 B」課題番号 25284064「現代フランス小説――第二次大戦および戦後の記憶の再編成の視座から」の成果の一部である。